

## 失語がある人の生活場面の エスノメソドロジー・会話分析研究 (2)

# Daily Life Scenes of a Person with Aphasia from Ethnomethodological and Conversation Analytic Perspectives (2)

西澤 弘行<sup>†</sup> 坂井田 瑠衣<sup>‡</sup> 川嶋 明子<sup>\*</sup>  
Nisisawa Hiro Yuki, Sakaida Rui, Kawasima Akiko

<sup>†</sup> 常磐大学人間科学部コミュニケーション学科, <sup>‡</sup> 日本学術振興会/慶應義塾大学環境情報学部,  
<sup>\*</sup> 西武学園医学技術専門学校言語聴覚学科

<sup>†</sup> Department of Communication Faculty of Human Science Tokiwa University,

<sup>‡</sup> Japan Society for the Promotion of Science/ Department of Environment and Information Studies Keio University,

<sup>\*</sup> Department of Speech and Hearing Sciences The Seibu Gakuen College of Medical Technology  
nisisawa@tokiwa.ac.jp

### Abstract

From ethnomethodological and conversation analytic perspectives, observing and analyzing life scenes of a person with aphasia, we show the way in which that person and others collaboratively achieve each local act and understanding with various modalities, and other rich resources. We focus on four phenomena in the conversation: 1) using adverbs solely with or without gesture, 2) using one fixed expression “maane” (“kind of”, “well” or “I should rather think so”) with or without delay, 3) laughter which closes turn sequence, 4) showing understanding at proper position in turn sequence.

**Keywords** — Aphasia, Collaborative Achievement, Life Scenes, Ethnomethodology, Conversation Analysis

### 1. はじめに

本稿では、失語がある人、Sさん（トランスクリプトでは「佐藤」、ともに仮名、50代男性、脳梗塞により右片麻痺、ブローカータイプ、現在は維持期）の実際の生活場面の一部を観察し、エスノメソドロジー・会話分析（EMCA）の立場から観察・分析・記述する。

発症前にSさんが行っていた陶芸教室を再開できるかの試行として始められた教室での様子を、著者らは継続的に録画・録音してきた。

失語症臨床に於ける検査場面や訓練場面では、以下のような特徴があると想定される。

- これらの場面での基本的な方向づけは“言語能力”を検査すること・訓練することであり、コミュニケーションすることへは必ずしも方向づけられていない。
- 失語がある人（以下「当人」と表記）が主として用いることが期待されているモダリティーは言語に限定されており、当人も検査者・訓練者も言語モダリ

ティーに注目するように方向づけられている。

- 検査場面では事前に用意された正解が、訓練場面では設定された目標がある。
- 参加者のアイデンティティーは、当検査される人・訓練を受ける人—検査する人、訓練をする人であり、前者は基本的に独力で発話することが規範とされている。
- 行われる行為は限定された行為（例えば検査場面では「反応」）である。
- 以上のような特徴の故もあって、用いられる資源は限られている。

これらの特徴を想定するのは、本稿の目的を分かりやすく説明するためである。失語症臨床に於ける検査場面や訓練場面についても本稿と同様のEMCAの立場からの研究を行なう必要があり、それを計画している。しかし、本稿と同様にEMCAの立場からの研究は、これらの特徴をモデルや仮説として検証しようとするものではない。そうではなくて、特徴の記述は、観察・分析の結果である。

一方、実際の生活場面では以下のような特徴が観察された。

- この場面での基本的な方向づけは陶芸を行なうという実践であり、そのためのコミュニケーションへと方向づけられている。
- 当人とその他の参加者が用いるモダリティーは言語に限定されておらず、表情、身振りなども自由に用いられ、当人もその他の参加者も様々なモダリティーに注目するように方向づけられている。
- 解決すべき課題（作業プランの作成、作業手順の

説明、作業の方法の説明など)は、具体的であり、その場その場で作られる。

- ・ 参加者のアイデンティティは教師-生徒であり、様々な行為、洞察、理解、そして実際の様々なふるまいが、利用可能なすべての資源を用いて、協働で作られる。

本稿および本稿と連続する研究では、Sさんによるオノマトペや身振りによる説明、また実際に手を出してやってみせること、生徒からの質問に対する答えをSさん以外の参加者がSさんと協働的に作り上げていくこと(あるいは、答えに辿り着けずに「諦める」こと)などが、具体的にどのように達成されていくのかを、録画・録音データと詳細なトランスクリプトを用いて、ことばとことば以外のモダリティの表現形式、その形式が行なっている行為、その行為が解決している相互行為上の課題は何かを分析することによって示していく。

## 2. 分析

今回注目する現象(形式)は次の4つである:

- 1) 身振りを伴ったあるいは伴わない副詞の単独の使用
- 2) 「う: : ん」などによる反応の遅延を伴ったあるいは伴わない、一種の定型表現「まあね」の使用
- 3) 連鎖を閉じる笑い
- 4) 理解を適切な位置で示すこと

### 2.1 副詞(+身振り)

#### 断片1 陶芸作品が焼くと小さくなるという説明

- 01 佐藤: まあこのまま、(《作品を指さす》)  
 02 (《親指と人差し指を向かい合わせる》)  
 ⇒03 : さらに。(《親指と人差し指を近づける》)  
 →04 坂上: さらにちっちゃくなる  
 05 佐藤: うん

01行目で佐藤は「さらに」という副詞のみを産出している。この発話の前に作品の大きさを示すことが明確な身振り「(《親指と人差し指を向かい合わせる》)」を行なっている。「さらに」の音調はターンが終わることを示す音調である。「(《親指と人差し指を近づける》)」の身振りは「さらに」と同時である。動詞(「小さくなる」)の意味は身振りで示すことが可能である。狭い意

味での失語(自体)の問題のひとつが構文であるとするれば、ここではそれを補っていると言える。受け手は「さらに」を繰り返すことで、「適切に聞いていたこと」を示し、加えて、身振りで示された動詞の意味を言語化し確認する。05行目で坂上の理解が正しいことを佐藤が承認している。

#### 断片2 作品を削ったので軽くなってきた。まだ削るのか、という質問と答え。

- 01 坂上: ちょっと軽くなってきたでしょう?  
 ⇒02 佐藤: もっともっと  
 →03 坂上: もっともっ(ha)と(ha)ha ま まずここ?  
 04 佐藤: うんうんうん [そう  
 05 坂上: [まず どうしよう ここ  
 06 ちょっと あ: さきにこっち? さきに  
 07 こっちを 今ね さきにこっちを  
 08 いま: 落としたんです。  
 09 佐藤: うん はいはい  
 10 坂上: うん:  
 11 : (1.0)  
 ⇒12 佐藤: まだまだ  
 →13 坂上: まだまだ もっともっとね  
 14 はい りょうかいです。  
 15 : (. )  
 16 佐藤: HE

01行目は「もうこれ以上削らなくてよいか」という許可の求めである。02行目は「まだ削り続けなさい」であり、許可の求めの却下であり削り続けることの指示である。03行目の「もっともっと」は02行目の「却下」と「指示」の理解を示している。05行目から07行目で坂上は今まで行なった作業の説明をすることで、次にどこを削るべきかを佐藤に聞いているように見える。11行目の前で佐藤は坂上の作品を手にして見て、置きながら「まだまだ」と言う。これは「どこではなくまだまだすべて削れ」という指示と聞くことができる。これに対して、坂上は「まだまだ」を繰り返すのみでなく「もっともっと」も繰り返すことで佐藤の指示を理解したことをより明瞭に示している。

この断片が断片1と異なる点は、身振りが伴わないことと、受け手が構文化しないことであるが、参加者間で間主観的理解が達成されていることは2つの断片ともに同じである。

## 2.2 (反応の遅延「う：：ん」) + まあね

**断片 3** 作品に色を今日付けるのか、という質問と答え.

(トランスクリプト中の nd は、その直前の発話と共起している領きを示す。以降の断片でも同様。nd は 1 回の領き。nd2 など nd の後に数字がある場合は領きの回数を示す。)

→01 増田：あれ？ せんー これ今日磨いたー

→02 いろー いろ？＝

⇒03 佐藤：＝[うん nd

04 増田：＝[つけるの

⇒05 佐藤：はいはい

これは反応が遅延していない例である。断片 4, 5 と比較していただきたい。

増田の 01, 02 行目の質問に対して 03 行目で即座に反応している。2.4 で述べる「理解を適切な位置で示すこと」の例でもある。佐藤は 02 行目で増田が「いろ(色)」と言った時点で、増田の発話が「先生、今日、自分(増田)は作品を磨いた後で色を付けるのか」という質問であると理解して、03 行目で領きながら「うん」と言っている。これが 04 行目の増田の「つけるの」と重複したために、04 行目で明確に「はいはい」と返事をやり直している。01 行目の増田の発話はかなり「崩れた」発話である。それでも佐藤は、理解が可能な最も早い位置という意味に於いて適切な位置で反応している。

以下、断片 4 と 5 では反応の遅延の後に一種の定型表現である「まあね」が続く事例を見る。

**断片 4** 作品の高台(糸底)の広さについての質問と答え.

→01 坂上：広い方がいい

⇒02 : (1.0)

⇒03 佐藤：う：：ん まあね nd2

01 行目で坂上は、自分が削っている高台(糸底)の広さ(直径のことと思われる)について質問している。したがって 02 行目の (1.0) の間は坂上に質問を宛てられた佐藤の沈黙である。この沈黙とこれに続く「う：：

ん」により反応は遅延されている。優先組織の観点からは 03 行目の TCU は非優先的な特徴を示している。その故にこの位置の「まあね」は、01 行目の質問に対する端的な(あるいは完全な)肯定には聞こえない。音調的にも何らかの「躊躇」に類するものに聞こえる。とは言え、明確な否定にも聞こえない。結局、肯定でも否定でもない、どちらでもない応答として聞ける。むしろ、質問に答えることを回避していると聞くことができる。高台の適切な広さについての説明をことばによって行なうことが困難なために、説明をすることを回避するやり方である可能性がある。

重要なことは、まったく答えなかったり、「分からない」と言ったりするのではなく、答えていながら非優先的な組み立てをすることで、「はい/いいえのどちらでもない応答」として聞こえるようにしていること、そして、それには端的に「はい/いいえ」で答えられない何らかの理由ないしは困難が存在することを示していることである。ちなみに、トランスクリプトにはないが、このあと、受け手である坂上は、1 秒以上の沈黙のあと別の質問を始めている。

次の断片 5 では、困難さの内容が若干異なっている。

**断片 5** ろくろから完成した作品をどうやって切り離して移動させるか.

→01 高崎：かたてでどうやってやんですか

⇒02 佐藤：う：：：んまあね nd(.) こう こう

01 行目はやり方を問うている。形式的にも「どう」のある、所謂「疑問詞疑問文」である。したがってここでは、そもそも「はい/いいえ」のうちの非優先的な応答故の遅延ではなく、「やり方をことばでうまく説明できないこと」を遅延と「まあね」で示していると聞くことができる(ただし、ことばでうまく説明できないのは、失語症の故なのか、それとも、そもそも微妙なやり方をことばで説明するのが難しいのかは、現段階では分からない)。尚、「こうこう」の部分では「手つき」を実演している。

この 2 つの事例では、「まあね」の持つ「応答の曖昧さ」が何らかの「困難」を伴っていること、その困難さの内容は「ことばによって詳しく説明すること」であることを示していたが、次の断片 6 では、むしろこの表現形式の「曖昧さ」そのものが焦点化されている。連鎖の構造もやや複雑である。

**断片 6** 作品を紙やすりでこすっているが細かい箇所  
に指が入らない。

- 01 増田：ここのところってさあ  
02 佐藤：うん  
03 : (2.0)  
→04 増田：こうやって(.) 磨くしかないの  
⇒05 佐藤：う：：：ん  
06 : (.)  
07 増田：haha[ha(振り返って佐藤の顔を見る)]  
08 佐藤： [うん  
09 増田：ね[え  
⇒10 佐藤： [まあね：  
11 : (2.0)  
12 増田：指が太いから入っていかない  
13 佐藤：hahahaha

01, 04 行目は断片 4 と同じ「はい/いいえ」の応答を  
求める質問であるが、質問の形式は一種の否定疑問  
であるが、「他の選択肢(別の方法での磨き方)を示せ  
/示してほしい」という要求/要望と聞くことができ  
る。05 行目の「う：：：ん」は断片 4 と同様に明らか  
な応答の遅延のように聞こえるが、07 行目の増田の笑  
いは、この「う：：：ん」を、(否定疑問に対する非優  
先的な応答、すなわち肯定の答えのための遅延とは聞  
かずに、) 自らの要求/要望に応えられないことの表明  
であると聞き、その表明を受け入れたことを表すため  
の笑いと聞くことができる。この笑いは 05 行目の表明  
、即ち、自らの要求/要望の拒否を、「笑うべきこと=仕  
方ないこと」として取り扱うことを表明している。この  
表明に対する佐藤の応答(08 行目)が、若干早くかつ  
弱かったために、09 行目で増田は自らの笑いを言語化  
し「拒否の受け入れ」を表明するが、これに対する佐藤  
の応答が「まあね：」である。ここで増田が行なうべき  
ことは、自らの要求/要望に対する佐藤の拒否が正当  
なものであることを明確にすることである。にもかかわ  
らず、10 行目で「まあね：」という「曖昧な」表現  
を選択したために、12 行目では、増田はここでのやり  
とりが笑うべきものであることを明確な言語表現とし  
て表すのである。それは一種の自己卑下をともなった  
冗談であり、これを笑いことができるのはまさに佐藤  
である。佐藤は 13 行目で大きく笑うことで冗談を理解  
したことを示し、同時に、05 行目の自らの拒否を増田

が「仕方ないこと」として受け入れたことへの理解も示  
す。さらにこの笑いは 2.3 で述べる「連鎖を閉じる笑  
い」の例でもある。

## 2.3 連鎖を閉じる笑い

**断片 2(再掲)** 作品を削ったので軽くなってきた。ま  
だ削るのか、という質問と答え。

- 01 坂上：ちょっと軽くなってきてしょう？  
⇒02 佐藤：もっともっと  
→03 坂上：もっともっ(ha)と(ha)ha ま まずここ？  
04 佐藤：うんうんうん [そう  
05 坂上： [まず どうしよう ここ  
06 ちょっと あ： さきにこっち？さきに  
07 こっちを 今ね さきにこっちを  
08 いま： 落としたんです。  
09 佐藤：うん はいはい  
10 坂上：うん：  
11 : (1.0)  
⇒12 佐藤：まだまだ  
→13 坂上：まだまだ もっともっとね  
14 はい りょうかいです。  
15 : (.)  
16 佐藤：HE

16 行目を佐藤は坂上のそばを離れて(顔も坂上の方  
ではない向きを向いている)歩き出しながら発してい  
る。身体的な志向性は坂上になくてもこの笑いは坂上  
に向けられているように見える。12 行目の佐藤の「指  
示」を 13, 14 行目で坂上は「了解」し(まさに「了解  
です」と発話している)、連鎖を閉じている。ではこの  
いったん閉じられた連鎖のあとの笑いは何か。直観的  
にはある種の後方拡張として聞くことができる。笑い  
の対象は、断片 2 全体で交わされた内容、すなわち、  
「(大分がんばったが)まだ削らなければならない」と  
いう事柄である。そのことを笑うべきこととしている  
のである。なぜか、削り続けることはある種の困難さを  
伴う。その困難なことを指示した佐藤は、坂上の「はい  
りょうかいです」という若干可笑しい表現に対して  
の笑いとも理解できる位置で笑ことによって、「その困  
難さは笑うべきことである、すなわち、重大なことでは  
ない」と自分の指示の正当性を主張すると同時に、坂上  
に対してある種の共感を示していると聞くことができ

る。そして、発話連鎖と活動の連鎖を閉じている。

尚、発話ではなく笑いが用いられていることについては、少なくとも以下の3つの可能性が考えられる。ひとつ目は、失語があるが故にこのような方法を用いて代替し、(良い意味で)やり過ぎることができるという可能性であり、ふたつ目は、失語でなくても用いることができる(汎用的な)方法のうち、失語があっても用いることができる方法を、適切な位置やタイミングで(ある意味で、失語がない人と同様に)利用できる可能性であり、みつつ目は、ふたつ目との区別が難しいが、この笑いは失語の有無とはそもそも関係がないという可能性である。断片6の笑いについては、みつつ目の感触がより強い。いずれにせよ限段階ではこれらの可能性を絞り込む根拠は未だ少ない。ここではこれらの笑いが現にこのような働きをしていることを記述した。

## 2.4 理解を適切な位置で示すこと

### 断片7 作品のプラン作り

- 01 坂上：ゆ：のみ茶碗じゃなくっ[て： nd  
((この発話の初めで作品を右手で持ち上げる))
- 02 佐藤： [うん nd
- 03 坂上：大きい(.) [てつき=[手がないカップ  
((「カップ」で左手を握り拳にして1回振る、頷き1回))
- 04 佐藤： [うん nd [うんうんうん nd3
- 05 (.)
- ⇒06 佐藤： ああああ： =nd4
- 07 坂上： =もあり?nd
- 08 佐藤： はい。《大nd》
- 09 坂上： そうだとするとすこし： ここが[：  
((この発話の初めで作品を右手から左手に持ち替え、「すこし」で、右手を作品の底に当てて、その後小さな叩くような動作を続ける))
- 10 佐藤： [うん nd
- 11 坂上： 広い方が[： nd
- ⇒12 佐藤： [う： んうん[うん《大nd》 nd
- 13 坂上： [安定がいいですよ
- 14 ね?
- 15 佐藤： う： ん nd そう (だ) ね

16 坂上： なぜかっていうとまえに：

17 : (1.0)

⇒18 佐藤： あああああああ nd4

19 坂上： なんかね： 花器作るとき不安定だった

01 行目から 07 行目までで坂上は自分の作品を湯飲み茶わんから取っ手のないカップに変更してもよいかと聞いている。03 行目までではカップの説明だが、坂上の行なおうとしている行為は許可を取ることであり、それは 07 行目で完結する。06 行目で佐藤はカップの説明を理解したことを表明している。12 行目では 13 行目で坂上が述べている内容を適切に「先取り」して、理解を示している。15 行目で坂上は 13 行目までの内容の理由を説明し始めるが、16 行目の 1.0 秒の間で佐藤は視線を中空に置き、「何かを思い出そうとしている」ことをしているように見える。その直後の 17 行目で、佐藤は 4 回の頷きを伴う非常に強い調子の発話を行なう。これは、坂上と佐藤が共有してる(はずの)過去の経験を「思い出し」そして「(理由と問題点を)理解した」ことを明確に示している。

## 3. おわりに

本稿では、1) 身振りを伴ったあるいは伴わない副詞の単独の使用、2) 「う： : ん」などによる反応の遅延を伴ったあるいは伴わない、一種の定型表現「まあね」の使用、3) 連鎖を閉じる笑い、4) 理解を適切な位置で示すこと、という4つの現象に焦点化して観察・分析・記述を行なった。これらの現象はすべて、参加者たちによる協働によって行なわれ、そのことによって間主観的理解が達成されている。重要なことは、そのような間主観的理解の達成がそれぞれの事例に於いてローカルに(局所的に)観察可能なデータとして見出すことができることであり、これは EMCA が認知科学と接する地点の一つである考えられる。

付記 1) 本稿は第43回日本コミュニケーション障害学会学術講演会での発表の内容をより精緻化したものです。2) Sさんと陶芸教室の参加者のみなさまに感謝しています。3) データを幾度も見ていただき貴重なご意見をいただいているビデオデータセッション@成城大学(主催：南保輔(成城大学)、運営：秋谷直矩(山口大学))参加者のみなさまに感謝しています。